

火鉢

波田 尚大

今月ご紹介するのは手をかざして暖まる暖房器具の「火鉢」です。五徳などを入れてお湯を沸かすこともできます。大きさから見て、「手あぶり」等とも呼ばれる小型の火鉢で、部屋全体ではなく、その周囲で火鉢に手をかざしている人を暖めます。大きさは直径が 230mm、高さが 280mm ほどで、成人男性の手が無理なく収まる形状です。色は火鉢部分には青味のある釉薬が、台部分には黒味のある釉薬がかかっています。火鉢の側面には、持ち運びをするための取っ手がついています。中には炭が燃え尽きて生じた灰が入っています。



火鉢

本資料は飯能市立博物館の前身である飯能市郷土館設立以前に収集された資料の一つであり、これと似た形状の火鉢が、天覧山のふもと、県下一とも言われた割烹旅館「東雲亭」の百畳敷の大広間を撮影した写真に写り込んでいます。

この写真では給仕をする 7 名の女性従業員、一番右手前の店主の横川竹造、スーツなどの礼服を着た 49 人の男性客を確認できます。酒の入った徳利や、料理が載っている盆とともに火鉢が置いてありますが、一人につき一つの火鉢が用意されていたことがわかります。左手前に八角形の、左手奥に丸みを帯びた形状の、右手前に展示中のものとよく似た形状の火鉢が写っています。



東雲亭 宴会の様子
横川直一氏蔵

小山友叶「飯能巷談その二 東雲亭」で紹介されていますが、撮影された東雲亭の百畳敷きの大広間の照明はシャンデリアで、和洋の要素が取り込まれていました。詳細な撮影年代は不明ですが、少なくとも戦前に撮影されたものだと思います。

当館では他にも箱火鉢や長火鉢などの様々な形状の火鉢を所蔵していますが、この写真により、同形状の小型の火鉢がいつ、どのような場面で、どのように使われていたのかを知ることができました。

このように、博物館で収集した様々な道具は、博物館資料として展示するため、調査・研究を行い、様々な視点から価値付けを行っています。

火鉢は『日本民具辞典』によると、昭和 37(1962)年頃から石油ストーブが普及していき、その姿を消していきました。

【参考文献】

日本民具学会『日本民具辞典』株式会社ぎょうせい 平成 9(1997)年 5 月

小山 友叶「飯能巷談その二 東雲亭」『奥武蔵釣りだより』第 97 号 私家版 平成 20(2008)年